専光寺付近遺跡ミニ展示

2021 年 12 月 22 日

はじめに

専光寺付近遺跡は、仙石土地区画整理事業にともない、昭和 62 年 8 月から平成 3 年 3 月まで発掘調査が行われました。現在、発掘調査で得た記録を整理し報告書を作成しています。今回は、その経過報告の一環として今から約 1300 年前の古代 (8 世紀～ 10 世紀) の墨書土器を紹介します。

墨書土器とは

漢字などの文字や記号・絵を土器の表面に墨で書き記したものを墨書土器と呼びます。主に古代 (8 世紀～ 9 世紀) の遺跡から少数出土します。

墨書される土器は、坏(つき)・椀(わん)・皿などが多くなっています。漢字一文字が主流であり、二文字以上記されている例は大変珍しいです。

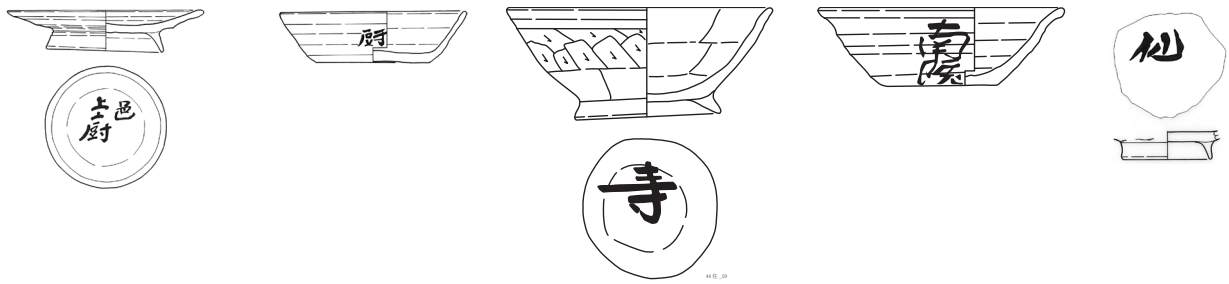
文字の内容は様々で、地名や建物・施設の場所を表し、墨書された土器の所属を意味する場合があります。内容がわからないものも数多く存在し、まじないの一種としても使用されたと考えられています。

場所を示す文字

大泉町は古代の上野(こうずけ)国邑楽郡に属していました。上野国は現代の群馬県のことです。邑楽郡は今でも使われているので馴染みがあると思います。

当時は、国の行政を司る施設が国府(こくふ)、郡には郡衙(ぐんが)がおかれていました。現代でいえば、国府は県庁、郡衙は市役所にあたります。上野国府は、現在の前橋市元総社町(もとそうじゃまち)に位置し、発掘調査によって様々な施設が確認されています。邑楽郡衙については、大泉町古氷(ふるごおり)にあると考えられています。郡衙は「こおり」と読まれ、「古郡(ふるごおり)」や「古氷」のような地名として残ることが多くあります。

「上邑厨」…上野邑楽郡衙の厨(くりや)という意味だと考えられています。
「厨」…郡衙(ぐんが)の調理場のこと。郡衙で働く役人の食事や、来賓の際に行われる宴を取り仕切っていました。
「寺」…古代では寺院は、国府や郡衙とともに建てられていました。
「南院」…郡衙や寺院など比較的規模の大きい施設を示していると思われます。
「仙」…まじないの言葉の可能性もありますが、やはり地名である仙石の仙を表しているのでしょうか。



線刻文字

文字が記されていたのは墨書土器だけではありません。瓦や砥石に刻まれた文字もありました。

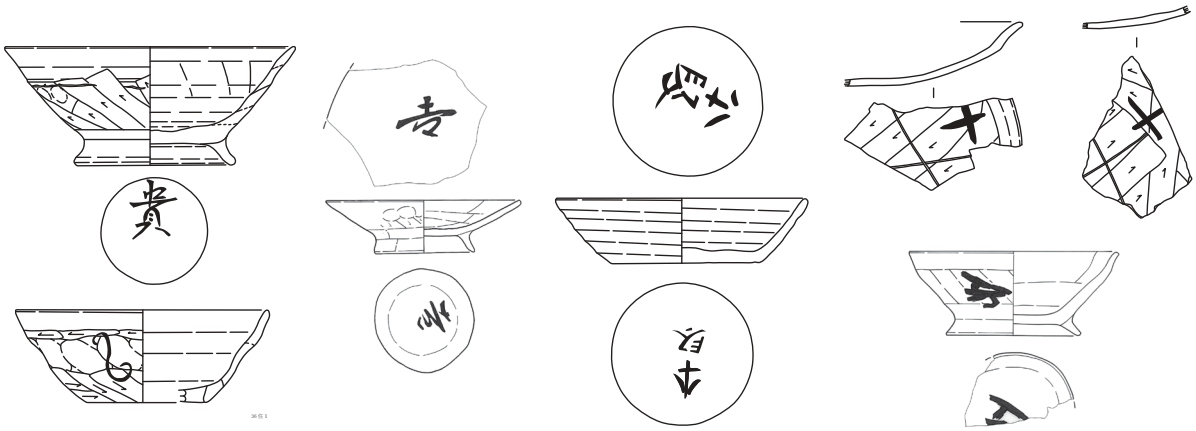
「奉」…窯で焼く前の瓦に記されています。当時瓦葺きの建物といえば寺院でしたので、神仏に奉納する意味を持つと思われます。

縁起の良い文字

墨書土器に記された文字の大半は漢字一文字であり、何を表しているか明確ではありません。しかし、文字自体にまじないや吉兆（きっちょう）の意味があるのではと考えられています。

記号

漢字だけでなく、記号が書かれている場合があります。「S」、「×」、「人」の鏡文字などがありました。

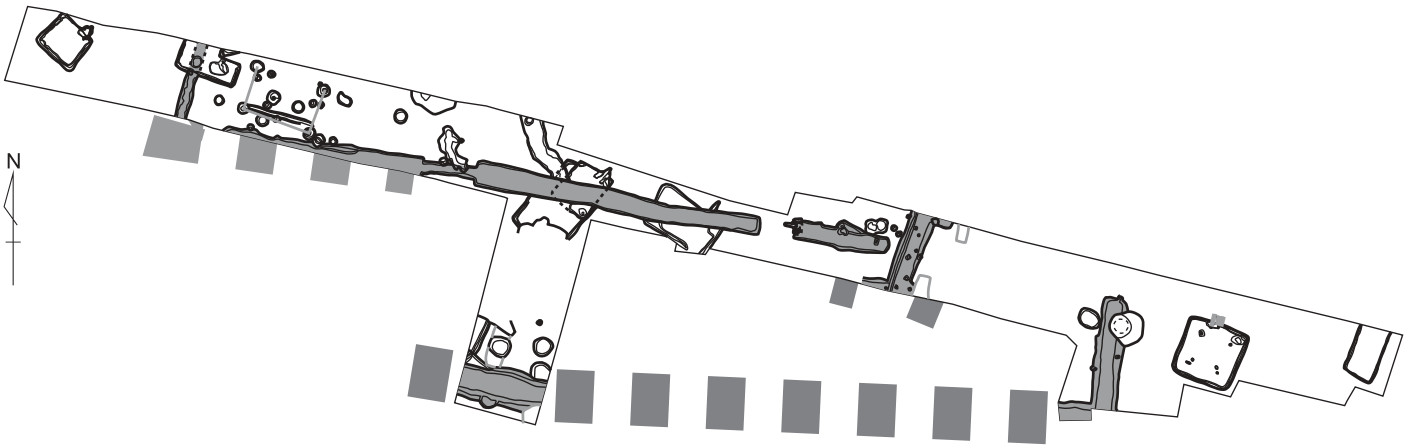


墨書土器を書いた人々

墨書土器の中には、書き順もしっかりとして、非常に達筆なものも見られます。専光寺付近遺跡に漢字を理解している優秀な人物がいたのでしょう。

専光寺付近遺跡は郡衙ではないにも関わらず、「厨」や「寺」といった墨書土器が出土しています。これはなぜなのでしょうか。専光寺付近遺跡では、有力者の館跡とみられる堀が見つかっています (注 1)。この館の人物が郡衙と密接な関係にあったと考えられます。また、瓦も多数出土し、寺院の存在もうかがえます。

(注 1) 石塚久則 1998「東毛地域における豪族居館と関連遺跡」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』第８回東日本埋蔵文化財研究会



館堀跡（３５－１号地区）　S=1/300

硯

墨書をする際に硯は必須です。現在は石の硯を使用していますが、古代では焼き物で作られた硯を使用していました。硯が出土することは大変珍しく、墨書土器が多く見つかっている専光寺付近遺跡ならではと思われます。

埼玉県坂戸市稲荷前Ａ区遺跡出土の円面硯（えんめんけん）

写真提供：埼玉県教育委員会